

妖怪恋愛物語 フユニャン編

レオジマネス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これ俺の中で1000突破した唯一のやつ。
消すの惜しかったな。

妖怪恋愛物語
フユニヤン編

目次

妖怪恋愛物語 フユニヤン編

俺が——バスターズに入った理由を教えよう。

今から1年前くらいだ——

ケイゾウ「フユニヤン……、今までありがとう……」

フユニヤン「ケイゾウ！縁起でもないことを言うなよ……ケイゾウ？おい、ケイゾウ！ケイゾウ!!!」

ケイゾウが死んだ。

俺はものすごくショックを受けた。

ケイゾウとの過去を思い出すと今でも涙が溢れ出てくる。

俺はケイゾウを失った穴埋めに何か始めようと思った。そして思ったんだ。生前ケイゾウが、「もし、何か始めようとするなら、何か人の役に立つことをしてくれ。正義のために平和を守る仕事がお前に向いてると思うぜ!」と言ってたんだ。だから、俺はバスターズに入ったというわけだ。

フユニヤン「今日から、バスターズに入ったフユニヤンだ!よろしくな!」

ジバニヤン「お、新入りかニヤン。オレツチがビシバシ鍛えてやるから、覚悟するニヤン!」

USAピョン「よろしくダニ!」

期待を胸に、バスターズのメンバーに挨拶した。

ふぶきちゃん「あ、新入り?よくここに入ったわね〜」

彼女は受付のふぶきちゃんだ。なんだかカワイイな……それより、隊長に挨拶しよう。

フユニヤン「隊長。今日からバスターズに入ったフユニヤンだ。」

ブリー隊長「おー!新入りか!こいつらともよろしくな!」

全員に挨拶が済んだ。今日からバスターズの日常が始まった。

と言うところだ。今では、妖魔界一のバスターズに成長している。だが、『何か』やりとげてないことがあるような気がする。胸が苦しいような……

フユニヤン「……なあ、USAピョン。」

USAピョン「何ダニ？」

フユニヤン「最近、胸が苦しいんだ。別に病気とかではない。ふぶきのところへいくとなぜか……」

USAピョン「それは多分『恋』ダニ。」

フユニヤン「恋……だと……」

USAピョン「多分そうダニ。勇気を出して、ふぶきちゃんのところへ行ってみるダニ。もしかしたら上手く行くかもダニよ。」

だとしたら、これは恋なのか？ふぶき……

フユニヤン「……なあ、ふぶき。」

少し照れくさく言った。

ふぶきちゃん「あ、フユニヤン。どうしたの？」

フユニヤン「お、俺のことどう思うか。」

ふぶきちゃん「え、何よ急に。別に……普通に思ってるけど……」

フユニヤン「ふぶきっ……！」

ふぶきちゃん「ん？何？」

フユニヤン「俺は多分——、」

——ふぶきが好きだ。